

ISAPH

アイサップ
ニュースレター

第25号

News Letter

2016年11月30日発行



写真: ラオス 健康教育の実習風景

ISAPHはラオスとマラウイの母親と
子どもたちの保健の向上を支援しています

NPO International Support and Partnership for Health





ラオスからの報告

踏み出す、活動への第一歩

ISAPH ラオス 佐藤 優

こんにちは。これまでのニュースレターでお伝えしたとおり、ISAPH ラオス事務所では、今年4月に新しいMOU (Memorandum of Understanding : 了解書) をカムアン県保健局と結び、そしていよいよサイブートン郡で本格的に活動を始める直前の段階までたどり着くことができました。今日は、最後の準備として郡保健局と郡病院の職員に向けて実施した研修についてお話ししたいと思います。

サイブートン郡における母子保健の問題を見渡したとき、国で定めている母子保健サービスがすべてに行えていないことに目が留まります。特に、病院などに来ることができない住民のために、職員が村に出張してサービスを行う「アウトリーチ活動」が実施できていないのは一つの大きな問題です。その背景には経済的な要因も潜んでいるため、すぐに解決できることではありません。しかし、村人たちはこの活動を必要としています。なぜなら、彼らは簡単に病院に行くことができず、健康に関する知識を得る機会も限られているからです。貧しい家庭はテレビもありませんので、どのように暮らすことが病気を予防するために必要なのか、情報を得ることができないのです。

さらにこの現状は、ただ「村人がサービスを受けることができない」ということを意味するものではありません。サイブートン郡の職員にとって、サービスが提供できない実情は、仕事で培われる経験や保健医療専門職として成長する機会も失ってしまうことに繋がるのです。その結果、職員が持っている、活動を行うための技術や自信、ノウハウが少しずつなくなってしまうのです。

ISAPHでは、このような現状を見て、現地の職員と一緒に母子保健活動をするには、まず研修が必要で

あると判断しました。職員への聞き取りから、病院の診察ではあまり実施されていない、「健康教育」に焦点を当てた研修が最も必要であると考えました。この健康教育という活動は、学校に行っていない人にも、男性にも女性にも、子どもにも大人にも分かりやすく話すための知識や技術、そして経験が必要です。私たちは、カムアン県保健局の職員と協力して、この健康教育を学ぶ研修を開催しました。

研修では、村人に情報を伝える難しさ、健康教育で情報を分かりやすくするポイント、教材の種類やそれらを用いてどのように計画を立てていくかについて講義が行われました。さらに、グループに分かれてテーマを決め、村人を集めて実習も行いました。慣れていないせいか、大勢の人を前に恥ずかしがる職員もいましたが、写真を見せたり、質問したり、ゆっくり話したり、どのように話せば相手により伝わるかを考えながら取り組んでいる様子が印象的でした。もちろん、健康教育は一度で上手になるほど簡単ではありません。しかし、この研修を通じて、これから始まる活動に向けて、少し自信がついたような職員の顔を見ると、私たちも全力で彼らを支え、住民の健康に寄与したいと感じました。



パネルシアターを使ったグループは栄養素について話しました



言葉だけで伝える難しさを「伝言ゲーム」で体験



職員の質問に答えるお母さん



セバンファイ郡での
栄養教育活動の様子

日本ラオス研究会 第4回大会に参加して

ISAPHラオス 木村 江里子

8月13日にJICAラオス事務所で開催された日本ラオス研究会に参加してまいりました。

この研究会は、ラオス研究者同士の情報交換の場、議論の場として2011年に発足し、第4回大会となる今回はラオスでの開催ということもあり、参加者60名という大規模な会となりました。参加者は研究者や援助関係者、ラオスに魅せられて長期滞在している方など多岐にわたり、計7名のラオスの様々な分野に精通している方々からの発表がありました。

発表者のトップバッターとして、私たちISAPHの理事である浦部大策医師より、ISAPHが過去10年間にわたり実施した「カムアン県・セバンファイ郡における母子保健プロジェクトの成果」についての発表がありました。ISAPHはセバンファイ郡の3地区で、母親と5歳未満児を対象に母子保健活動を実施してきましたが、対象地域において高い乳幼児死亡率と低体重児の多さが大きな問題となっていました。浦部医師は、その大きな原因として感染症と栄養不良があり、この2つが密接に関係しあって死亡率を増加させていたと述べられました。

これらの問題に取り組んだISAPHの活動の結果、対象地区での低体重児の減少が見られ、ビタミンB1欠乏症が原因だと推測される乳児死亡は2013年以降ゼロになりました。ラオスの特に農村部では、栄養バランスの悪い食習慣や健康に関する圧倒的な知識不足が問題でしたが、地道な健康教育を通じて、家族の命を守り、健康的な生活を送るためにはどうすればいいかを粘り強く伝え続け、それが活動の成果として実を結んだのだと感じました。

研究会ではこの他にも、日本で縫製関係の勉強をした後、ラオスに魅せられ10年以上もの間、精霊を崇拜する村でボランティアとして織物に関連する活動をしている方や、ラオスの伝統楽器ケーンの伴奏者として現在もラオス南部で活動されている方など多岐にわたる分野のスペシャリストから発表がありました。この会を通してラオスに関わっている日本人の層の厚さを実感するとともに、ラオスの伝統文化の奥深さを垣間見た気がしました。

「継続は力なり」とはよく言いますが、特定の分野の活動を突き詰めて長年にわたり追求し続けていくことで、ほかの誰にも真似できないような独自性のある知識・経験を積み上げることができ、他者からの尊敬を得ることができるのだということを再認識させられた研究会でした。

私たちの活動はサイブートン郡での母子保健活動ですが、ISAPHとしてセバンファイ郡で10年間培ってきた知識や経験を基盤とし、特定の地域でじっくり腰を据えて行うからこそできるきめの細かい援助、そして現地の草の根レベルの真の課題やニーズに取り組む活動ができるよう、切磋琢磨していきたいと思っています。



発表に真剣に聞き入る参加者



JOCA 活動視察を終えて

ISAPH マラウイ 朴 正美

2016年6月30日、ISAPHの活動地域と同じマラウイ国ムジンバ県で農民自立支援活動をしているJOCA（Japan Overseas Cooperative Association：青年海外協力協会）「農民自立強化・生計向上プロジェクト」の活動視察に行ってきました。ISAPHスタッフと、コミュニティから代表として選出された現地ボランティア計21名が参加しました。今回は活動視察だけでなく互いの活動を知るためのワークショップも実施し、ISAPHの栄養改善活動について知っていただく機会も設けていただきました。以下の通り報告いたします。

まずJOCAのプロジェクトサイトであるバクレゾーンを訪問し、代表の方から養鶏場、堆肥作り、窯によるパンづくり、にんにくやいちごなどの市場価値のあるものを作って現金収入を得る換金作物栽培などを見学させていただきました。バクレゾーンの皆さんがこれらの活動を始めたのは、それぞれのコミュニティでまずニーズアセスメントを行い、今自分たちに何が必要なかを認識したからとのことでした。また、換金作物の栽培を始めたことで家計水準が向上し、自宅の家具が増えたりトタン屋根を付けることができたりしたという話を聞き、その変化があった家も見学することができました。プロジェクトサイト訪問中はどの参加者も熱心にメモを取り、積極的に質問をしていました。

次に、ISAPHの活動内容紹介と健康教育を歌と劇を通じて伝えるワークショップを行いました。テーマは「六大食品グループの中から普段の食事にできるだけ多くのものを取り入れよう」というもので、農業を通じてコミュニティ開発を目指すJOCAキャッチメントエリアの皆さんに是非知っていただきたいメッセー



活動紹介で行った劇でのひとコマ

ジを込めて、当日まで何度も練習を重ねてISAPHスタッフと現地ボランティアが一丸となって準備してきました。JOCAのコミュニティーの皆さんもJOCAの活動内容に関する歌や劇を披露してくださり、大変盛り上がったワークショップとなりました。その後は、意見交換をする場となりました。「栄養について知ったことで、その知識を活かし今後どの作物を栽培するか考えたい」とJOCA側の参加者が言ってくださったことが印象的でした。

JOCAの活動を通して農民が安定した収入を得られ、人びとの生活水準が徐々に変わってきたこと、それらを実感した農民がまた他の農民へと伝え、より多くの人自立していき、コミュニティが活性化することがJOCAのプロジェクトの目的であることを知ることができたのは、我々にとってとても大きな出来事でした。帰りのバスの移動中、数名が「エディングニに戻ったら早速換金作物を作って、より栄養のあるものを子どもたちに食べさせるんだ!」と意気込んでいたほどです。

このように参加者は今回のJOCAの活動視察を通して「自ら問題点を探り、解決に導くこと」の重要性を感じてくれたと思います。村民が抱える問題に対して自発的に問題解決に向けて活動していくことがコミュニティ開発をより早く進められることも実感したのではないのでしょうか。



視察後の記念撮影



説明を熱心に聞く参加者たち

ラオスプロジェクトの 新たな展開を探るために

ISAPH事務局 磯 東一郎

10月9日から9日間、プロジェクトの進捗確認と今後の活動計画の策定のため、ラオスに出張しました。また、今回の出張では、家庭菜園と昆虫食を活かした栄養改善の導入を具体化するため、私が所属している食用昆虫科学学会の会員で、現在NPO法人JVCに所属しサワンナケート県で森林保全と持続的な農業の支援を行っている平野将人氏宅を訪問し、家庭菜園と食用コオロギ養殖の情報収集を行いました。

今回の訪問で強く感じたことは、ISAPH現地事務所働く日本人職員のプロジェクトにける熱い思いです。現在抱えている業務だけでも多忙な中、積極的に情報を収集し、村人による新たな栄養改善活動の導入、カエルや食用昆虫の養殖、ルクセンブルク政府の保健プロジェクトとの連携など、新たに多くの計画案が検討されていました。また、母子の健康増進、栄養改善に向け、新しい取り組みに挑戦しようとする彼ら



村の子どもたちのために

の熱意と行動力を非常に頼もしく感じました。国際協力は能力や技術も重要ですが、それ以上にその志の高さで、達成できるレベルが異なると感じています。課題が山積していると、その対処に追われ、自分が何のために仕事をしているのか忘れがちです。その時、道標となるのが「村の子どもたちを健康にしたい」という強い信念だと思っています。今後のプロジェクトの動向が楽しみです。

国際学会へ参加して考えたこと

ISAPH事務局 村井 俊康

第48回アジア太平洋公衆衛生学術連合国際会議 (Asia-Pacific Academic Consortium for Public Health Conference) が2016年9月に東京都で開催されました。ISAPHからは、理事の浦部医師及び事務局から村井が同学会へ参加し、当団体の活動を紹介しました。村へ保健サービスを届ける体制の改善という観点から、現地ボランティアの活用についてポスターにまとめて発表しました。

さて、ポスターの読みやすさや、視覚に訴える表現もさることながら、学会発表では、考え方や論理をどう表現するかが大切であると強く感じました。そもそも、ISAPHの活動は、問題の所在を明らかにし、それに対して介入を行うというものです。公衆衛生や村落開発の問題をうまく見える化しながら、プロジェクトを推し進めることでそれがどのように解消されるのかを表現できれば良いですし、また、そこが面白さなのだろうと感じています。

今回の学会では、日本における生活改善の歴史についても発表があり、当方としても大変興味深く聴講しました。ISAPHでは、活動地域における母と子の栄

養状態を改善したいと考えています。そのために、先のマラウイでのプロジェクトでは、栄養や衛生に関する正しい知識を普及しましたし、その中で、現地ボランティアの活用という流れにもつながりました。今後、知識普及の対象や方法について新しい手法を試すことも一つの可能性です。もっとも、知識の普及のみでは(他の問題も改善されない限り)もう少し見える形での栄養改善には結びつかないのではないかと危惧しています。保健医療の知識のみではなく、農村開発や収入向上など、他の知識も持った上で活動地域へと入っていくことが重要なのではと考えています。



ポスターについて説明するISAPH理事の浦部医師

着実に進みつつある保健医療分野での日本外交

一 伊勢志摩サミット、ナイロビでのTICADにおける成果 一

ISAPH理事 わたなべ 渡部 和男

2016年、まだ終わっていませんが、いろいろなことがありました。その中で、目立たないけれども着実に結果を出しつつある保健医療分野での日本外交について説明します。

5月26、27日に三重県で開催された伊勢志摩サミットにおいては、世界経済の安定化、テロ対策、北朝鮮問題、海洋安全保障などの主要なテーマについて先進7カ国（G7）の首脳の間で議論されました。首脳宣言と同時に6つの付属文書が採択されましたが、その一つが「保健対策」です。要点は、「エボラ出血熱の教訓を生かし、公衆衛生危機対応を強化する。ユニバーサル・ヘルス・カバレッジ（UHC）を促進し、脆弱性が高い国の保健システムを強化する。人口の高齢化

が世界経済に及ぼす影響を認識し、活動的な高齢化に向けた取り組みを促進する」といった内容ですが、日本は、サミット議長国として、この文書の取りまとめに尽力しました。

一方、8月27日にアフリカのケニアで開催された第6回アフリカ開発会議（TICAD VI）で安倍首相は、今後3年間で官民総額300億ドル（約3兆円）規模の投資をアフリカに対して行い、技術者や感染症対策の専門家など約1,000万人の人材育成に取り組む旨発表しました。日本はこれまでアフリカに対し、保健医療分野では、ワクチン接種などにより30万人以上の命を救った実績があり、また、感染症対策の専門家を約3万人育成しています。このように、感染症で苦しんでいるアフリカ地域において、しっかりした保健システムの構築に協力しているのです。

日本は1988年より、ポリオ（急性灰白髄炎）撲滅の分野で国際協力を実施して大きな成果を上げ、世界から評価されています。地道に活動を継続すること、これがやがて「力」になり結果を出します。保健医療分野での国際協力は、日本外交の大きな柱の一つとなっているのです。

ラオスの村に根付く母子保健事業を目指して

ISAPHラオス 木村 江里子

はじめまして。7月末にISAPHラオス事務所にプロジェクト調整員として赴任しました木村江里子と申します。今回は3歳の娘を連れての赴任なのですが、公私ともにチャレンジングな状況であるにも関わらず、ラオスで活動する機会を与えてくださり、温かいサポートをしてくださっている関係者の方々に心から感謝しています。

私自身、近年はアフリカでの滞在が多かったため、久しぶりのアジア、その中でもアジア最後の桃源郷と言われるラオスの街並み・人・風景に自然と癒されています。

ISAPHは今年から活動地をサイブートン郡に移し、対象村において草の根レベルでの母子保健事業を展開しています。村の母子保健分野の課題としては、村民の健康に関する知識不足、地域保健サービスの脆弱さ、医療施設へのアクセスの地理的・経済的問題、古くから伝わる慣習による健康への悪影響など様々なものがあります。

これらの問題を効果的に改善していくためには、様々

なアプローチを組み合わせる包括的な取り組みをしていく必要があります。ISAPHが活動を終えた後の継続性やインパクトを考えると地域保健システムの強化は必要不可欠ですが、それに加え、既存のリソースを活用してラオスの村に根付く継続性・発展性のある仕組みづくりにも取り組んでいければと考えています。

近い将来、活動の達成感に浸りながら、娘とともにメコン川に沈む夕日をのんびり眺める日を夢見て、これから日々の業務に邁進したいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。



サイブートン郡保健局職員と

マラウイでのインターン活動報告

ISAPHマラウイ（インターン） 原田 有理子

こんにちは。ISAPHマラウイ事務所にて1カ月間インターンをしておりました九州大学歯学部6年の原田有理子です。今回のインターンシップには「トビタテ留学JAPAN」の一環として受け入れていただきました。インターンとして、農村での口腔保健調査や歯科医院訪問を行い、またセカンダリースクールで授業を行いました。それぞれについて大まかですが報告いたします。

(1)農村での口腔保健調査

6つの村で合計60人に対して「1日の歯磨き回数、歯磨きの方法、歯が痛くなる原因」などの複数の項目について調査を行いました。歯ブラシではなくMuulaという木で磨く人がいること、歯磨き粉の代わりに「砂、重曹、メイズの粉、石鹼、灰」などで磨いていることが分かりました。歯が痛くなった原因として、近所の人との交友関係の悪化でその人の思いが通じて歯に影響が出たと言う人や、村のタブーを犯したためだ、と言う人にも会いました。

(2)歯科医院訪問

各地の8つのクリニックを訪問しました。マラウイには歯科大学がなく、Dentistと呼ばれている方は全てDental Therapistであり、本当のDentistは外国人か海外で免許を取得したマラウイ人のみです。治療の大半は抜歯で、抜歯後の補綴治療も行われておりません。治療方法も日本とは違うことが多くて驚きの連続でした。例えば、治療器具をそのまま隣の患者さんと共有していたり、注水機能の故障により治療を何度も中断して患者さんが自分でうがいに行ったり、という状況を見たりしました。またDental Therapistでない方が自宅で抜歯をしていると聞き訪問しました。歯科で使用される抜歯器具は一切使わず、ペンチで抜く

とのことです。勿論、そのペンチに対する消毒は行っていないとのことでした。

(3)セカンダリースクールでの授業

友人が働くバラカ・セカンダリースクールで口腔保健に関する授業を行いました。合計100人

くらいの学生が参加してくれて2時間程度行いました。「ファントの蓋を歯で開けることで歯が強くなる」「ファントは水だから虫歯の原因にはならない」などの誤解があることが分かりました。またペアワークでお互いの口の中を見てみよう、歯の数を数えてみよう、というように楽しく行えたことが一番良かったです。

インターンシップ前は、マラウイ人の口腔状態はいいものだと予測していました。そのような学術報告が存在しているのは事実であり、砂糖の摂取量もはるかに少ないのだと考えていました。しかし、村人の口腔状態は想像以上に好ましくありませんでした。確かに虫歯の本数は少ないのかもしれませんが、一度虫歯になると抜歯以外の治療方法が存在しないため、痛みを我慢して虫歯のままだったり、抜歯後の補綴治療がないため歯が無い状態のまま生活することを余儀なくされています。歯科分野はエイズ、マラリア、結核のように命に直接関連しないという理由で重要性が認知されていないのが現状です。しかし、歯科は命の脅威になる分野ではないかもしれませんが、美味しく食べて、楽しく会話をするなどの生活の質に直結する分野です。今回見た現状、得た問題意識を忘れずに夢に向かって邁進していきたいと思います。最後になりますが、マラウイ事務局をはじめとするISAPHの皆様、現地でお世話になった皆様に大変感謝しております。



ホームステイ先の家族と



バラカでの授業



歯科医院を訪問、現地Therapistと共に

最近のできごと 2016年6月～2016年9月

- 6月27日 【ラオス】 サイブートン郡MOUのキックオフミーティングを開催
- 6月30日 【マラウイ】 JOCAの活動を視察
- 7月4日～9日 【ラオス】 パーコーン村・パークワイトン村・パークワイドン村において、住民登録を実施
- 7月20日 【ラオス】 木村江里子がプロジェクト調整員として着任
- 7月25日～27日 【ラオス】 アウトリーチ活動のための初期研修を開催
- 8月・9月 【マラウイ】 チカンガワにおける成長モニタリングを視察
- 8月13日 【ラオス】 日本ラオス研究会第4回大会に参加
- 8月15日 【ラオス】 ご寄付いただいた白衣等をサイブートン郡病院へ寄贈
- 8月18日 【ラオス】 ISAPHの新カウンターパートとしてカムパナーワン氏が着任
- 8月19日 【ラオス】 サイブートン郡での初めての定期活動をパーコーン村で実施
- 8月21日～26日 【ラオス】 聖マリア学院大学・東京医科歯科大学のスタディツアーを受け入れ
- 8月29日～9月30日 【マラウイ】 原田有理子氏をインターンとして受け入れ
- 9月17日～19日 第48回アジア太平洋公衆衛生学術連合国際会議（東京）に参加
- 9月28日 【ラオス】 サイブートン郡ナパオ地区におけるLuxembourg-Developmentの活動を視察
- 9月29日 【ラオス】 定期活動会議の開催（第2四半期）



入会と寄付の
お願い

ISAPHの活動を発展させるために、一人でも多くのご入会、ご寄付をお待ちしております。

法人会員 年会費：30,000円

一般会員 年会費：3,000円

【振込先】

郵便振込 口座名 特定非営利活動法人ISAPH
口座番号 00180-6-279925

入会ご希望の方、ご寄付をお願いできる方は、ISAPH事務局までご連絡いただければ幸いです。

—— 特定非営利活動法人 ISAPH ——

【福岡事務所】

〒813-0034
福岡県福岡市東区多の津4-5-13 スギヤマビル4階
TEL.092-621-8611

【東京事務所】

〒105-0004
東京都港区新橋3-5-2 新橋OWKビル3階
TEL.03-3593-0188 FAX.03-3593-0165

E-mail jimukyoku@isaph.jp

URL <http://isaph.jp/>

ISAPHの役員名簿

役職	氏名	備考
理事長	小早川 隆敏	東京女子医科大学名誉教授
理事	深見 保正	元福岡県企業管理者
理事	浦部 大策	聖マリア病院国際事業部
理事	江藤 秀顕	神山復生病院
理事	渡部 和男	龍谷大学法学部客員教授
監事	竹之下 義弘	弁護士(東京六本木法律特許事務所)

【ISAPH ニュースレター 第25号 編集スタッフ】

石原 潤子／磯 東一郎

社会医療法人
雪の聖母会



聖マリア病院

理事長：井手 義雄 病院長：島 弘志

〒830-8543 福岡県久留米市津福本町422
TEL.0942-35-3322(代) FAX.0942-34-3115
URL <http://www.st-mary-med.or.jp>

- 厚生労働省臨床研修指定病院
- 厚生労働省歯科臨床研修施設
- 厚生労働省臨床修練病院
- 地域医療支援病院
- 福岡県救命救急センター
- 福岡県総合周産期母子医療センター
- 福岡県救急告示病院
- 福岡県地域災害拠点病院
- 福岡県エイズ治療拠点病院
- 福岡県肝疾患専門医療機関
- 福岡県災害派遣医療チーム指定医療機関
- 福岡県第二種感染症指定医療機関
- 地域がん診療連携拠点病院
- 福岡県小児救急医療電話相談施設
- 福岡県児童虐待防止拠点病院
- 久留米広域小児救急医療支援施設
- A Baby-Friendly-Hospital-Initiative (赤ちゃんにやさしい病院) WHO・ユニセフ指定
- 自動車事故対策機構NASVA療護施設
- ISO 9001 認証施設
- ISO 15189 認定施設
- 日本医療機能評価機構認定施設 (一般病院 Ver.6.0)
- 日韓医療技術協力指定病院
- 久留米市病 (後) 児保育施設

※本ニュースレターの発行は、社会医療法人雪の聖母会聖マリア病院にご協力をいただいています。